

(A)

ワークショップおよび国際委員会等参加報告書

2013年4月22日

報告者	氏名：高倉浩樹
	所属：東北大学東北アジア研究センター

会合名	Arctic Science Summit Week 2013
会合目的	実務者会議(Business Meeting)における人文社会作業部会 (SHWG) 会合出席と科学シンポジウム参加。
主催団体 (共催の場合並記)	International Arctic Science Committee
会合年月日	2013年 4月 13日 ~ 4月 19日
会合場所	会場名称： Jagiellonian 大学 国名 (都市名)：ポーランド・クラクフ市
出席者 (日本人は所属とともに分かる範囲で記載)	実務者会議の人文社会作業部会：高倉浩樹, Peter Schweitzer USA, Gail Fondahl Canada, Ludek Broz Czech, Arja Rautio Finland, Joan Nymand Larsen Iceland, Dongmin Jin Korea, Peter Sköld Sweden, Halvor Dannevig Norway, ROBERT CHR. THOMSEN – ALTERNATE FOR DENMARK、LOUWRENS HACQUEBORD – NETHERLANDS, Otto Harbec Germany, Peter Jordan Holland, VOLKER RACHOLD (IASC EXECUTIVE SECRETARY)など陪席者も多数
会合開催の経緯	IASC の実務会合として毎年この時期に会議を開く
主要な議論と決定事項	1 前回国合の議事録承認, 2 2012年活動報告, 3 関連学会や行事への関与 4 研究の方向性(Scientific foci)についての検討, 5 2013年の活動提案 6 予算審議, 7 執行会議選出
本会合の今後と関連会合	2013年に活動については2014年のヘルシンキ会議で検討。それ以外には2014年5月に国際北極社会科学学会 (IASSA) の第8回大会がカナダで開催される。
会合における報告者の役割、発表内容	日本代表としての日本の北極圏人文社会科学の概要についての説明。JCARにおける人文社会研究者の位置づけについての説明。研究の方向性を定める際への議論への貢献をした。
報告者ないし日本のコミュニティー・JCARが留意すべき点、およびアクションを起こすべき事項	従来の気候変動だけでなく、人間開発・エネルギー問題・交通運輸システムに絡む課題が北極研究において重要な課題になりつつある。そのため国際的な北極研究の枠組みにおいては、人文社会系の研究者との協力体制が急速に進んでいる。日本はこの点で決定的に立ち後れている。北極研究に関わる人文社会学者が相互にそして理系分野と協力できる体制を構築する必要が急務である。具体的には、人類学・言語学・考古学・国際関係・経済学・環境政策などの分野の研究者のダイレクターなどを作る必要性および関係者が一同に集まる機会を早急に構築する必要がある。
備考 (上記以外の事項)	
添付資料 (○をつける)	<input type="checkbox"/> アジェンダ <input type="checkbox"/> 主な参加者一覧 ・会合の配布・発表資料 (可能な範囲) ・会合主催者作成の報告書 (後日提出可) ・その他 ()